

巻 頭 言

長崎短期大学 学長

安 部 恵 美 子

昨年秋の民主党への政権交代で、文部科学省は5.9%と過去30年で最も増額したものの、その内訳は高校授業料の無償化に多くの予算が割かれ、高等教育関連予算は対前年比で減額になっています。加えて、18歳人口の減少による入学志願者の減少、景気の悪化による深刻な就職難、といった入口・出口の問題、さらには、学生の多様化の中での教育の質保証への要求等、日本の高等教育を取り巻く環境は年々厳しさを増すばかりです。

こうした中で、短期大学が21世紀の「知識基盤社会」「生涯にわたる循環型学習社会」実現に資する地域密着型の高等教育機関との評価を受け続けるには、教育内容や方法のさらなる向上・充実への組織としての取り組みが求められます。とりわけ、教員の資質の向上、すなわち、教員の教育力、研究力、地域連携力の涵養は最重要課題です。

さて、短期大学の教員の日常を見わたせば、短大教育課程の特性や学生の資質を反映して授業運営や学生指導等の「教育」活動のウエイトが高く、自らの専門領域に関する「研究」活動が年々困難になっているというのが実感です。

しかしながら、高等教育機関である短期大学では、学び続ける主体としてのモデルを教員が示すことは、学生の自ら学ぶ姿勢の確率を促すことにつながります。ゆえに、教員の教育力と研究力は決して相反するものではなく相乗効果をもたらすものとして捉えなくてはなりません。

また、研究の成果については、学生、同僚教員、関係分野の研究者集団、さらには、地域のステークホルダーに広く公開し、関係者からの指導や批評を真摯に受け止めることも必要です。これは、高等教育に携わる者としての使命であると思います。

本研究紀要に掲載された各論文は、執筆担当教員研究に対する篤い思いが感じられます。忙しい学務の間を縫っての執筆活動への取組に心より敬意を表したいと思います。収録論文は、アカデミックな内容のみならず、短大の教育活動の中で積み上げられた実践研究の成果も数多く報告されています。ここに発表した研究内容の今後のさらなる発展・拡大を心から期待します。

最後になりましたが、なかなかかはかどらぬ原稿の集約状況に心を砕きながら、編集作業に携わっていただいた紀要編集委員諸氏のご尽力に感謝申し上げます。

平成22年3月

学長 安部恵美子